



TITLE:

# 資本主義の運動法則における論理的なものと歴史的なもの(三)

AUTHOR(S):

吉村, 達次

---

CITATION:

吉村, 達次. 資本主義の運動法則における論理的なものと歴史的なもの  
(三). 経済論叢 1960, 85(6): 409-424

ISSUE DATE:

1960-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/132758>

RIGHT:

# 經濟論叢

第十五卷 第六號

---

ユートピアについて……………穂 積 文 雄 1

資本主義の運動法則における  
論理的なものと歴史的なもの(≡)…吉 村 達 次 27

明治前期における輸出関税撤廃論争…梅 津 和 郎 43

ワイトリングの生涯と  
『調和と自由の保証』……………高 橋 正 立 58

---

昭和三十五年六月

京 都 大 學 經 濟 學 會

# 資本主義の運動法則における 論理的なものと歴史的なもの(三)

吉 村 達 次

## 六

一 前稿において、マルクス経済学の特徴が、資本主義経済を完成形態において把えた上で、その諸現象を支配する法則を明らかにしようとしただけではなく、二の形態から他の形態への移行の法則、すなわちある形態の生成・発展・消滅の法則をも明らかにした点にあること、そして、この特徴が、資本論第一巻第二三章までにおいて行われた資本の直接的生産過程の分析と、第二章「謂わゆる本源的蓄積」において暴力的契機を中軸にすえて行われている本源的蓄積過程の分析との関係に具体化されていることを、第二章の序説ともいべき第一節「本源的蓄積の秘密」の検討を通じてしめそうとした。そして、これら二つの法則を統一的に把握しようとするところに、マルクス自身それによつて自らの経済学を他のブルジョア経済学から区別したところの、歴史的・主体的性格が顕現していることをしめそうと試みた。

本稿においては、「第一節」にしめされた本源的蓄積過程分析の方法視角にもとづいて、「第二節」以下の歴史

的叙述の意義をより詳しく検討する。

二 「第一節」末尾において、マルクスは、「農村生産者すなわち農民からの土地収奪」を本源的蓄積過程全体の基礎をなすものとして、その重要な意義を暗示したのであるが、歴史的叙述の最初の節は「農民からの土地収奪」の叙述にあてられ、十五世紀後半から十九世紀の前半にかけて数世紀にわたってイギリスの農村に荒れ狂った土地の暴力的収奪の陋劣で、無慈悲極まる光景が、それぞれの事件の歴史的意義の適確な分析を伴いながら描写されている。以下、第三節「十五世紀末以来の被収奪者に対する血醒め立法。労賃圧下のための諸法律」においては「暴力的に土地を収奪され、追放され、浮浪人とされた農民民は、グロテスクでテロル的な法律によって鞭打たれ、烙印を捺され、拷問にかけられて、賃労働制度に必要な訓練を仕込まれる過程が述べられている。このように一方における土地の大所有者への集中、他方でのプロレタリアートの創出が暴力的に遂行され、資本制的生産方法のための前提条件が整えられたのちに、「第四節」では「資本家的借地農業の創生記」が論じられる。次いで第五節では「工業に及ぼす農業革命の反作用。産業資本のための内地市場の作出」の分析によって、農業における資本主義の発達が工業における資本主義の発展を促し、相互に市場を提供しあいながら有機的に結びつき、結局農業に対する工業の支配が確立してゆく過程がしめされる。そして、第六節「産業資本家の創生記」において植民制度・国債制度・近代租税制度・保護制度等々いずれも国家暴力の利用を通じて資本蓄積を急速に拡大することが詳しく述べられ、最後に、第七節「資本制蓄積の歴史的傾向」において総括的結論として、資本制生産はまずそれに先行する私的所有と労働の一致にもとづく生産様式の否定者として現れ、次に資本制的私的所有の否定による所有と労働の社会的形態における再統一が第二の否定として続き、この点から見れば、資本制生産様式は諸生産様式の質的移

行過程の一経過点にすぎず、社会発展の歴史的段階を構成するにすぎない所以が、しめされている。

さて、このようにマルクスの叙述を順を追って眺めて見ると、単なる歴史的事実の羅列ではなく、本源的蓄積過程の歴史的全貌が明確に浮びあがるように、一定の方法によつて論述がすすめられていることがわかる。

まず、次のような疑問を提示することから始めよう。右のように本源的蓄積の全過程の基礎として第一に農民からの土地収奪が論じられていることは、産業資本一般の分析が行われたのちに始めて資本制的利潤の派生形態として地代が論じられ「地代発生史の歴史」が述べられている「資本論」の論理構造からすれば一見奇異に感じられないでもない。周知のように「経済学批判の序説」において、経済学における論理的なものと歴史的なものとの照応関係の特殊な様式を論じたところで、両者の照応が直接なものであつてはならない例として、地代―土地所有の論理的地位が歴史的地位の逆にならねばならないことがあげられている。すなわち、資本制生産様式をその生成・発展・消滅の過程において把えようとする科学的経済学にとっては、資本制生産の発生に歴史的に先行する土地所有―資本制以前においては土地所有が生産支配の主要なテコであつた―から出発して、資本制生産に説き及んだ方が自然な順序のように見える。しかし実際はこれほど間違つたことはない。何故なら、資本主義社会においては、農業は次第に工業によつてその支配的地位を奪れ、資本に従属するものとなる。資本は地代なしでも理解されるが、地代は資本なしでは理解できないものとなる。したがつて資本がブルジョア社会の出発点および終局点を形成し、土地所有以前にその一般的全容が展開されていなければならない。このように土地所有―地代を例としてしめたのちに、一般的結論として、経済学の諸範疇を歴史上それらが決定的な役割を演じてきた順序に並べ、しかも科学としての論理的統一性を期待することは不可能であり且つ間違つてをり、むしろ近代社会の内部においてそれらの

諸範疇が相互に如何に係合しあい、編制されているかによつて、論理的配列の順序が決定されるべきで、そしてその結果は自然的順序または歴史的発展の順序と「正に逆」であるとしている。

「資本論」の篇別構成における地代論の地位が、右のようなマルクスの考え方の具体化にはかならないとすれば、「本源的蓄積」の章においては全過程の基礎たる重要性から最初に分析されている農民的土地所有や資本主義的土地所有の発生等の問題を、地代論中の「地代発生歴史」に関する章ではどのように取扱つてゐるか、両者の視角の相違を検討してみなければならぬ。それによつてさきの疑問を解決する鍵が与えられるであらう。

すでに前稿でも幾度か指摘したように、「本源的蓄積」の章において、マルクスは事実上封建制から資本主義への移行過程を論じているのであるが、この移行過程は、「資本論」中の他の部分、例えば商業資本や地代に関する諸篇の最後にも論じており、また、のちにマルクスの再生産Ⅱ実現の理論の具体化としてレーニンによつて發展された資本主義生成の理論も、市場論的視角から小商品生産から資本制商品生産への移行を取扱つてをり、資本論第二巻第三篇の「再生産過程の分析」を補足するものと見なすことができる。このように、マルクスは、移行過程についても、資本論の論理が抽象から具体へ本質から現象形態へと進むにつれて、それぞれの段階の論理的視角に照応して、種々な角度から取扱つたものと見て差支えないであらう。そこで、「本源的蓄積」の章と「地代発生歴史」の章では、それぞれが位置している「資本論」第一巻および第三巻の論理的性格に應じて、同じく土地所有を取扱うにしても、視角が異らざるをえないであらう。

「地代発生歴史」の章において問題になるのは、土地という特殊な生産手段の所有にもとづく所得Ⅱ地代形態が、封建制の内部での生産力の發展に伴つて如何にして労働地代・現物地代・貨幣地代というように變化するか、

さらに封建制崩壊の結果として生じた自由な分割地農民にとってその小土地所有にもとづく所得が如何なる形態をとるようになるか、さらに資本制地代えの過渡たる分益地代形態について分析が行われているのであるが、要するに封建的搾取形態から資本制的搾取形態の移行において、土地という特殊な生産手段の所有から生ずる特殊な問題、地代諸形態の変化の歴史的順序での叙述が直接の課題であり、歴史発展の法則性をそれ自体としてしめすものではない。もちろん、地代の近代化・ブルジョア化という点から見て、それからより遠く距っているものから、より近く接近しているものと、順次並べたかぎり、地代の歴史的傾向をしめしているともいえるのであるが、そういうものも実はその根底に、封建的生産様式から資本制生産様式への移行——生産の全過程を包括する移行——の法則がすでに前提されてをり、それを土地所有という特殊な局面で一面的に反映しているからにすぎない。本質から離れて形態がそれ自身で自己発展をとげることとはなく、諸形態の特定の序列が歴史的なものと見なされるかぎり、必ず何らかの本質の漸次的または根本的变化を根底に潜めていなければならない。

他方では「本源的蓄積」の章における土地収奪——農民的小土地所有の崩壊とブルジョア的大土地所有の形成——いうまでもなくこの所有形態の変化そのものは、なお直ちに農民的小経営から資本主義的農業経営への移行をしめすものではなく、単に後者の急速な成長のための客観的・主観的条件を準備するだけであり、したがって暴力的方法による土地の集中が、生産力の発展による資本制生産への止み難い潜勢力によって促進されるとはいえず、現実の資本制の大経営の発展テンポを追いつくこともあるのである——は「全過程の基礎」であるが、「基礎」はなお全部ではなく、さきにマルクスによつて叙述されたこの過程の内容を概観したところからも明らかなように、工業における資本主義の発達、その農業に対する優位の確立等々の諸契機をもふくめて、はじめて本源的蓄積の全体がし

めされるのであり、この全体を綜括する普遍的法則が、かの歴史的敘述を通じて追求されているものと見なければならぬ。この綜括は、終節「資本制蓄積の歴史的傾向」において与えられている。

この節の冒頭に本源的蓄積過程を簡潔に要約して、次のようにいつている。

「資本の本源的蓄積、すなわち資本の史的創生記とは、結局どういふことなのか？　それが奴隸および農奴の賃労働者への直接的轉化、したがって單なる形態交換でないかぎりには、それは直接的生産者の収奪、すなわち自分の労働に立脚する私的所有の解消を意味するに他ならぬ。」

つまり、奴隸や農奴が一たん封建的従属から解放されることなしに直接賃労働者に轉化する場合は、彼等の被搾取者たる地位は、依然そのままであるが、ただ搾取形態が異なるにすぎない。しかし、自由な自営農民や手工業者がその生産手段を収奪されるという点から見れば、「自分の労働に立脚する私的所有の解消」であり、自立的生産者から被搾取階級への転落であるというのである。上述の議論と関連して注目すべき点は、ここでは自営農民も手工業者も自己の労働と自己の生産手段にもとづく私的小生産者として普遍的概念の下に包括されていることである。

土地という特殊な生産手段の私的所有という条件によつて制約される農民ではなく、生産手段一般の私的所有による私的生産<sup>II</sup>労働者として手工業者とその性質を共にする側面だけが問題となつてをり、そして以下、この私的所有と労働の一致にもとづく小経営が否定され、両者の分離にもとづく資本制的生産の成立、さらに後者の否定によつて所有と労働の新たな段階での再統一——所有と労働の両面にわたる社会化にもとづく統一——の過程が分析され、これを否定の否定の法則としてしめしているのである。したがって本源的蓄積過程の本質的意義は「自己の労働を基礎とする個人的な私的所有」にもとづく「生産様式」の否定と「資本制的な私的所有」にもとづく生産様式



の成立——生産様式の移行の法的必然性を明らかにした点にあるということである。

第一に、本源的蓄積の全過程の基礎を農民からの土地収奪としたということの背後には、封建的生産様式の下での基幹生産部門が農業であり、主要な生産手段は土地であり、この部門における資本主義的経営の発達に封建的生産様式そのものを最後の崩壊せしめるものであったという事情があるからで、土地問題そのものを対象としてゐるのではない。第二に、資本制生産様式の成立にとっては農業における資本主義の発展は二次的な意味をもつにすぎず、工業における資本主義の発展とその国内市場支配、したがって農業に対する工業の優位の確立、農村による都市支配の代りに、都市による農村支配がより必要な条件である。これらの諸要件が実現されてゆくことが、封建的生産様式から資本制生産様式への移行の過程にはかならない。したがってこの章では、移行の本質的内容すなわち封建的生産関係の崩壊と資本制生産関係の成立ということが問題であり、この本質そのものの移行が右の諸要件に媒介されて実現されるということである。媒介された成果は本質そのものの移行であり、媒介的諸要因の分析によって移行の本質的内容を明らかにしようとしたものであり、前者にその目的があるのではない。しかも、媒介的諸要因を個々に全面的に分析したのではなく、ただ暴力的契機だけを中軸において分析したところに特別の意義があるのである。すなわち、本質そのものの移行において暴力的契機——階級闘争——が一般的な本質的な一契機であることがしめされる。

このように見てくれば、何故にマルクスが本源的蓄積過程の分析を土地収奪という特殊な局面から始めたか、そしてさらに農業革命の都市工業におよぼす影響を分析し、さらに「産業資本家」の創生記にまで説きおよんだか、また説きおよばねばならなかったか、が明らかになるであろう。土地収奪についていえば土地という特殊な生産手

段の所有形態の変化という特殊な局面に中心があつたのではなく、それが封建制の決定的崩壊を物語るものとしてのみ意義があつたのであり、また農業に対する工業の優位にまで説き及んだのは、それが資本制生産様式の確立を表現するからである。かくて、生産様式の根本的な質的变化という社会発展の本質的過程の諸契機を明らかにするためにのみ土地収奪その他の諸現象が分析されたのであつて、移行期における後者の諸現象——土地所有や商業資本——の相対的に独自の作用については「資本論」の後の諸章に譲られたのである。逆に移行に関するこれらの後編の諸章が資本論の内的論理編制の中で単に任意的補足的なものでなく、不可欠な部分と見なされるのは、すでに第一巻第二四章における上述のような分析が移行法則の本質を明らかにしているからである。しかし第一巻の段階では移行過程の本質的側面は明らかにあつたとしても、なお全面的に明らかにするものではなく、そのためには資本論の論理展開がより具体的な段階に進まねばならなかつたのである。

要約すれば、本源の蓄積の章は全体として移行の本質過程を説明したものであり、かつ資本の運動法則の説明を完成するものとして不可欠のものである。しかし移行の現実過程の全部を説明するものでなく、また説明もできないのであつて、資本論の論理展開にしたがつて特殊な局面が個々に説明されねばならなかつたが、これらの個々の章での歴史的分析の法則性も、また資本論体系での不可欠な地位も、「本源の蓄積」の章の右のごとき意義および地位によつて保証されているのである。

三 なお補足的に、本源の蓄積過程分析の冒頭におかれた「自由な自営農民」——ここでは自己労働にもとづく私的生産者としての側面がその本質をなすものとして取扱われている——と、資本論冒頭におかれている資本の出発点としての商品の対応について若干ふれておく。

すでにのべたように資本論冒頭の商品は、範疇としては單純な商品であるが、資本制生産の産物であり、しかも資本制的性格を捨象されたものとしてのみその完成された形態で与えられる。そして資本制的性格のこの捨象は資本制生産が日々行っているところの捨象であり、決して恣意によるものではない。資本制生産の結果としては資本制的商品でなくてはならないが、資本の前提としては單純商品としてののみ意義をもつ。ところで、この抽象物たる單純な商品生産は資本制生産のもっとも一般的特徴をしめすものであり、したがってもっとも抽象的な範疇であるけれども、資本制的性格を捨象したものという制限をいつまでも引きずっているかぎり、資本と等範疇のものであり、またその捨象性そのものが依然として資本に依存するから、これを直ちに資本の論理展開の出発点におくことは單なる便宜上のことであるか、独断であるかでありえない。もちろん、それによって資本制生産の分析が行えないというのではない。いなむしろそれから出発しなければならぬ。だがそれだけでは分析は不徹底に行いえない。具体的には資本制生産の肯定的側面だけしか把握できない。もちろん單純な商品は單なる範疇としては「ノアの洪水以前の定在を有する」のであって、資本主義以前あるいは以後の商品生産にも妥当する。だからマルクスは商品の分析において資本主義以前の古代の商品生産についてもふれている。だがこれは單なる例証にすぎないのであって、それが單純な商品を資本分析の出発点におく理由になつてゐるわけではない。

さて、單純商品と資本が相互に他を前提しあうというこのぐるぐるまわりの円環運動を脱れるためには、この円環の外にありしかも円環の出発点たるものを求めなければならない。換言すれば、資本にその存在を依存せず、しかも資本の前提となりうるものを求めなければならない。ここからわれわれは歴史の領域に入らなければならない。何故なら、資本制生産に関する経済学的諸範疇が、具体的存在としての資本主義の概念的反映でなくてはならない

と同様に、資本の円環からはみ出す範疇は資本発生以前の現実的歴史の反映でなくてはならないからである。

ところで、単純な商品という範疇はそれ自体としては資本以前にも以後にも存在したのであるから、資本よりも広い範囲を包括するものと見ることはできる。そしてその中には資本に依存しないで定在する単純な商品を見出す。しかし今度はそれらが資本の前提・出発点たりうるかが検討されなければならない。古代の商品や社会主義社会における商品は資本の前提としては単なる抽象的可能性を有するだけで現実的な前提たることは不可能である。次に資本制社会内部になお残存する農村あるいは植民地の小商品生産はどうであるか。これは一見資本の外にあり、しかも資本に原料あるいは食料を供給することによって、資本の前提たる意義をもっているかのように見える。しかしこれは外観にすぎない。何故なら、それらの定在は資本に依存していないが、その生産物が原料または食料品として販売されるのはすでに資本制生産が確立し前提されているからである。また彼等自身の内部から資本制生産が発生することは可能であり、その意味では資本の絶対的な前提でもありうるかのである。しかし、すでに資本制生産は確立しているのであり、新資本の発生は殆んど剰余価値の資本への転化によって賄われており、単純な小商品生産者からの資本制生産への転化は僅かなものでしかない。資本制生産の支配する社会では単純な商品生産者——小商品生産者でしかありえない——はその付属物でしかありえないのであり、彼の自立性は外観にすぎない。

このように、歴史上実在する単純商品の多くは、右のような資本の出発点たる要件を充たしえないのであるが、資本発生 of 歴史的 analysis は封建制の末期、資本制生産の歴史的登場以前に、「自由な自営農民」または「独立手工業者」の広汎な存在に具現されたところの、そして現実に資本創生の広大な土壌となったところの、小商品生産の存在を見出す。それは、その発生を資本に依存せず、しかも資本が世界史の一エポックを劃するほどに大量に急速に

發生する土壤となつたという意味では、資本の絶對的な前提であつた。このことが歴史的分析によつて証明されれば、思惟の出発点は、科學的に証明された歴史的事實によつて根拠づけられることになる。もはやそれは便宜的なものでも、独斷的なものでもなくなる。ただし歴史的事實といつても歴史的な形態と攪亂的な偶然性を取去つた歴史的な取扱ひ方でなくてはならない。すなわち自由な自營農民あるいは独立手工業者という特殊な形態は取去られ、自己労働にもとづく私的生産者という一般的性格において取扱われることで、出発点たる意義を獲得する。何故ならそのような一般的性格において彼等は、當時の歴史的過程における本質的な役割——生産様式そのものの移行の出発点——を果したからである。

しかし、これだけではまだ充分ではない。このような「自由な自營農民」あるいは「独立手工業者」として具現される私的生産者自体は、上述のような意味で資本の絶對的な出発点として現れるが、それでは資本制生産様式の歴史的必然性の証明としては不十分だからである。スミスが近代社会の經濟法則を分析しようとしたとき、その出発点に単純な商品生産社会を想定し、しかもその發生を形而上学的に説明したこと、そして、社会的分業と私的生産にもとづく商品生産社会を永遠化し封建社会を不合理なものとして批判するだけで、両者の歴史的連関を見失つたことはあまりにも有名である。したがつて、単純商品生産それ自体の歴史的相對性をしめさなければ、資本制生産の歴史的相對性を徹底的に明らかにすることはできない。マルクスは、「資本論」第一卷首章商品分析において、商品形態が労働生産物の歴史的形態にすぎないことを明らかにし、この形態を絶對化する古典派の誤謬を曝露した。しかし、なおこれだけでは労働生産物の絶對的形態と商品形態の相對性が區別されただけで、ある時代の單純商品生産の歴史的意義を他の時代から區別することはできない。また、單純商品生産はそれ自体としては社会發展の基

本的段階の一つを構成するものではない。したがって、歴史の流れの中から単純商品生産だけを取り出し、これを孤立的に絶対化して資本の出発点たらしめたのでは、資本制生産様式を歴史発展の基本路線の上に定着せしめることはできない。ここに資本制生産の出発点たる単純な商品生産を封建的生産様式の崩壊過程の中で位置づけることが必要になってくる。もとより資本論は資本主義社会を取扱うものであり、その発生史は資本主義の歴史的相対的性質を明らかにするだけで充分であり、したがって、その出発点たる商品生産が封建制の崩壊過程の産物であり、生産力の発展に封建制のワク内で適応しうるギリギリの生産形態であること、したがってその解体は同時に封建制の土台の決定的な崩壊を意味することが、歴史的事実として確認されておりさえすればよい。

このようにして、資本の前提としては絶対的な単純商品が、封建制の崩壊の産物としては、歴史的相対的なものにすぎないことが明らかにされることによって、資本制生産だけでなくその本源的土壌もまた歴史的なものであることがしめされるならば、はじめて、資本制生産を完全に人類の世界的発展の中に位置づけることになり、その生成・発展・消滅の法則も徹底的に曝露されるのである。

このように資本制生産を徹底的に歴史主義的に分析することにマルクスの方法の特色があることは、次のエンゲルスの一文によっても明らかであろう。

「われわれが今までに有するところの経済学は、殆んど専ら、資本制生産の仕方の発生と発展とに限られている。それは封建的生産に並びに交換形態の残存の批判にはじまり、資本主義的生産がそれに取って代る必然性を証明し、しかる後、資本主義的生産の仕方とそれに対応する交換形態との法則を、積極的な面、すなわちそれらの法則が一般的な社会目的をその方向に促進する面、に向けて展開し、そして最後に、資本主義的な生産の仕方の社会主義的批判、すなわち、その諸法則の消極的な面に向

つての叙述、この生産の仕方がそれ自身の発展によって、自分自身を不可能ならしめるに点にまで追いやられるという証明、をもつて終るのである。……

ブルジョア経済学のこの批判を完全、遂行するためには、生産、交換、および分配の資本主義的形態を知っただけでは足りなかった。それに先行したり、あるいはそれと並行して発展のおくれた国々に今なお存続する諸形態も、同様に、少くともその特性だけは、研究され、比較されねばならなかった。このような研究と比較とは、今日まで、全体としてはただ、マルクスによってのみ企てられた。したがってまた我々は、前ブルジョア的理論経済学について、これまでに確立されたものも、ほとんど専らマルクスの研究に負うのである」(「反デューリング論」第二篇第一章対象と方法)

このようにマルクス経済学の方法を特徴づけたのちに、エンゲルスは、資本制生産と交換の「歴史的に規定された形態の法則ではなく、「永遠の自然法則」を究明しようとしたブルジョア経済学者の方法の特徴を指摘し、マルクスに對置しているのである。

しかし、マルクスの「資本論」の構成は、エンゲルスのしめしたように、まず封建制の批判から始めるというようにはなっていない。これは一応資本制生産の完成された形態を分析しなければ、資本の發生の研究が不可能だからであり、他面完成された形態の分析だけでは資本主義の運動法則の究明は不充分に終らざるをえないが故に、資本の本源の發生史の研究を第一巻「資本の生産過程」——すなわち本質過程の分析ののちに最後に加えたのである。しかし、この章が最後にきているについては、も一つの理由がある。それは円環の外から内え、内から外えの飛躍には、主体的契機が決定的意義をもつということと、関連する。資本の再生産過程の内部にとどまるかぎり、如何に資本蓄積の敵対的性格の深刻化が曝露されてもこの飛躍の契機は明らかにされえない。移行過程の分析だけがそれをしめしうる。だから第一の否定における分析の成果は直ちに、資本蓄積の悪循環から抜け出し、第二の否定

を実現するための主体的諸条件を示唆するのである。

四 マルクスは、資本制蓄積の歴史的傾向を、生産関係は生産力の性質とその発達水準に照応しなければならぬという社会発展の基本法則を基軸にして総括し、小生産者の私的所有の否定としての資本制的私的所有の成立、さらに後者の自己否定による社会的所有の形成という否定的媒介による三段の推転をしめすところの歴史的法則として特徴づけた。すなわち、資本制生産は自己に先行する古い生産様式の自己否定の産物であると共に、その発展過程において自己否定の契機を生み出し、やがて新しい生産様式に路をゆずるべきものとしてののみ、歴史の発展過程の中に特定の位置をしめうるのである。したがって、資本の運動は、単なる円環運動ではありえず、円環の出发点がその復帰点であると共に、新しい円環運動の出发点でもあるところの、螺旋運動でなくてはならない。それが質の移行を意味するかぎり否定の否定としても特徴づけられるものである。こういう点から見れば、「資本論」の対象を資本制生産の再生産構造の法則として規定することが、厳密な意味では誤りであることは明らかであろう。何故なら、この規定は、資本の運動法則を資本関係の再生産したがって資本制生産の肯定的側面のみを包括するものとし、事実上、否定的契機を法則の外に放り出す結果となるからである。資本の再生産過程は一面では資本制生産の矛盾を激化するのであるが、その激化は直ちに否定的契機が自立化し、肯定的側面に外的に対立することを意味しない。矛盾の激化自身が再び資本制生産の継続の前提としてもあらわれる。すでに述べたように資本蓄積の進行に伴う富と貧困の敵対的關係の増大は、一定の条件が整えば直ちにその原因たる資本主義の根本矛盾そのものに対する闘争に労働者をかり立てるであろうが、他面では資本の威力を増し労働者の服従を強制する要因であり、資本關係の再生産を容易にするものとして作用する。だから、再生産構造の把握にとどまることはできないのであつ



て、かの「一定の条件」をも明らかにするところまで進まねばならない。他方、資本発生の歴史的法則——移行の法則——を明らかにしなければ、資本の再生産の運動の出発点に関する独断論や不可知論を批判することができないし、資本主義の歴史的運動およびその自己否定の運動を世界史の必然的流れの中に位置せしめることができない。いづれにせよ、資本の運動法則を再生産構造の把握に制限するときには、資本の生成・発展・消滅の法則との内的連関を見出すことは遂に不可能となる。あるいは論理的なものと歴史的なものの統一的把握を歴史の基底においてしめすことができないから、いきおい並列的に把握するにとどまるか、歴史的なものの法則的概念的把握を断念するか、いづれかにとどまらざるをえない。

たとえば、向坂逸郎氏はその著「マルクス経済学の方法」において、論理的なものと歴史的なものの統一的把握を意図され、また「本源的蓄積」の章の意義を移行における飛躍の問題として正しく理解されながら、他方では、「社会主義社会の成立の必然は、それが、資本の内在的矛盾として存するかぎりにおいて明らかにされているが、矛盾の展開が社会主義社会に『飛躍』する階級闘争の事実の歴史は、含まれていない。『資本論』の中でその事実と言及されていないというのではない。むしろ逆で、このような事実も含まれているが、それは、この書の本質的部分ではない。それなくしても本書はなり立ちうる」。

とされることによって、事実上論理的なものと歴史的なものを統一的に理解する途を自ら混乱せしめていられる。右のような考え方は、「本源的蓄積」の章の意義を「飛躍」の問題として一面では正しく理解されながら、その主要な契機をマルクスが暴力的契機においたことを見逃しておられること、ひいては、第二三章の窮乏化の法則と、第二四章第七節「資本制蓄積の歴史的傾向」において始めて簡単ながら指摘される「資本制生産過程そのものの機

構によって訓練され・結合され・且つ組織されるところの、労働者階級の叛逆」の増大という要因とを無媒介的に結びつけられているところにも見られる。したがって、資本の再生産過程を分析したのちに、資本の発生と終焉が資本論第一巻の末尾において同じ章の中で論じられていることの意義が把握できない。またこの資本主義否定の主体的要因に関する指摘は、さしあたり、なお資本論第一巻という段階で行われているにすぎないが、経済学批判体系が世界市場と恐慌にまで展開される中で、如何に一層具体化されるかという展望と関連せしめることによって、この要因も具体化されるであろうこと、また今日では資本論を刊行した当時とは異り、社会主義への移行が現実のものとなったという歴史的進展の中でそれを考慮しなければ、資本論体系そのものの理解を固定化するおそれがあること、これらの点を、右の向坂氏のような規定では、考慮に入れる余地がしや断されてしまうであろう。

また、歴史的要因の法則的把握を断念されこれを類型論の領域に入れてしまう例を、宇野弘藏氏の方法論に見ることが出来る。(未完)